

指導者の言葉かけが子どもの練習意欲に及ぼす影響
～子どものパーソナリティに着目して～
**The Influences of Coaches' Utterances on Children's Training Motivation:
From the Viewpoint of Children's Personality**

1K09A0341 今福 智絵

主査 岡浩一朗 先生

副査 石井香織 先生

【目的】

少子高齢化に伴い、運動を行う子どもの数自体が減りつつあるが、子どもの体力や運動能力の低下が叫ばれる中で、スポーツ指導者による子どもへの質の高いコーチングがより一層求められている。特に指導者の言葉による指導は、スポーツを行う子どもの技術的な面だけではなく心理的な面においても子どもを励まし、サポートする強力な武器となる一方で、子どもの心を傷つけ、やる気をくじいてしまう危険性も持ち合わせている。子どもに対する言葉かけの種類とやる気に及ぼす影響に関する先行研究は多くあり、肯定的な言葉かけで練習意欲が高まり、否定的な言葉かけでは低下する傾向にあることが明らかになっているが、言葉を認知する子どもの性格、特に言語能力や精神が発達途上にある小中学生のパーソナリティを考慮したものは見受けられなかった。そこで、本研究では、子どものスポーツの現状を明らかにし、理想的な指導者像を再考したのち、指導者の言葉かけを子どもがどのように受け止めているのかに関して、子どもの性格特性を考慮した調査を行い、子どもの運動に対するやる気を引き出すために効果的なコミュニケーションを確立するための一助となる研究にすることを目的とした。

【方法】

都内の陸上教室に所属する10～15歳の男女12名(男児6名、女児6名)を対象に、性格特性を把握するための主要5因子性格検査システム小学生用質問紙を用いて回答を得たのち、指導者に言われてやる気が出た言葉とやる気を失った言葉に関するフォーカスグループインタビューを実施した。性格検査により得られたデータは、村上(2011)が開発したソフトを用いて、外向性(E)、協調性(A)、良識性(C)、情緒安定性(N)、知的好奇心(O)、問題攻撃性(Ag)の6つの基本尺度ごとに点数化を行い、各項目の得点をグラフに表した。そのスコアをもとに「全体的な印象」としてBigFiveの50タイプの性格特性の中から最も近いものを算出した。フォーカスグループインタビューでは録音記録の文章化と発言者ごとのキーワード抽出を行い、対象者が個々に発言した内容を指導者に向けられてやる気の出た言葉とやる気を失った言葉に分類し、

表に示した。本研究では指導者に向けられた言葉に対する子どもの認知と性格特性との関連を見ることを目的とするため、性格検査の結果と、インタビューでの個々の発言を照合し、12名分の事例研究として取り扱った。

【結果】

対象者12名の性格特性は2名を除いてすべて異なったが、指導者の肯定的な言葉かけによってやる気が高まり、否定的な言葉かけでやる気が低下するということは子どものパーソナリティに関係なく多くの子どもに共通していた。個人によって言葉かけの状況や内容は異なるものの、12名中11名が指導者からの「いいぞ、できるぞ」「頑張れ、ファイト」「こうすればもっと良くなるよ」「この年でこんなに速い子なかなかいないよ」といった賞賛や励まし、助言、能力評価などの肯定的な言葉かけを行われた際にやる気が高まり、12名中10名が「まじめにやれ、集中しろ」「だからお前はだめなんだ」といった命令口調の要求や行動・人物否定などの否定的な言葉かけや、指導者からの言葉かけが何もなくかったこと(無視)に対してやる気を失う、という結果が得られた。

【考察】

本研究の対象者12名では、子ども自身が良いプレーをしたと感じたとき、また、自分でうまくできたかわからないときに「すぐに、その場で」行われた賞賛や励まし、助言、能力評価などの肯定的な言葉かけでやる気が高まり、具体的な改善策や励ましを伴わない命令口調の要求や行動・人物否定などの言葉かけを受けたときや、指導者から無視をされたと感じるときにやる気が低下するという傾向にあった。このことから、子どものやる気を引き出す、子どものやる気を削がないためには指導者が子どもの行動や心情を注意深く観察し、「肯定的な言葉かけや改善のフィードバックをすぐに、的確に行うこと」、「励ましや具体的な説明を伴った注意や叱責を行うこと」、「声かけを行う子どもに偏りがないようにすること」に留意して、子どもへのスポーツ指導を行う必要があると考えられる。また、性格特性のほかに指導者との関係や指導者に対する印象が子どもの言葉の受け止め方に影響するということも考察された。